

出だしは、「ICWES は大学の先生主体の会だから統計だらけ。どうせ行くなればこれまでやったことの無いプレゼンやりませんか？」と言う一言から始まった。女性技術士の会は現場で働く女性達の集まり、ICWES の学術的な発表には少々飽きていた。世界の女性はもっと恵まれた職場で働いているのだろうか？いや、もっと悲惨な状況で働いているのだろうか？我々が抱いていた素朴な疑問に内容は即決した。

[世界の働く女性技術者たちの事情を聞いてみよう！]・・・ということで世界5カ国の働く女性達にそれぞれが抱える問題や解決法をWS形式で話し合うことになった。

10月にプロジェクト会議を開き、11月30日、締め切りギリギリでアブストラクト提出。翌年4月にはICWES本部より無事受理されたとの報告があった。が、ここから先“企画書提出期限オーバー”や“司会者のドタキャン”と困難が続いた。中でも大変だったのは5人のパネリスト選びである。日本人2人は「お願い！」のひと言で「OK」をもらったが、オーストラリアには誰も知り合いがおらず、事務局にお願いし、紹介してもらった。残る韓国、アメリカであるが、依頼書を送り続けたものの返事がなく、理事長の岩熊さんと夜中のメール交換が渡豪1週間前まで続いた。結局イギリスのICWES会長にお願いした。韓国の方は「斯くなる上は現地で」ということで飛行機に乗ったのであった。

現地では、初日のアジアセッションで「引き受けてくれそうな人を1人見つけた！」と岩熊さんからの朗報を得て、夜のウエルカムパーティーで彼女に内容を伝え、パワーポイント作成のためのUSBを渡した。ホテルの部屋で、空欄のパワーポイント、配布資料（これらは、直前事務局へ印刷をお願いした）、紹介パネル、各項目を埋めて7月22日を迎えた。

何人来るだろうか？とドキドキしながらも、「昨日の同室の発表は2～3人しか入っていなかった。今日もそうかな？いやメンバーかき集めれば8人くらいにはなる。」と思いながら準備に取り掛かる。途中ふと後ろの客席を見たとき、参加者の多さに心の中で万歳を叫んだ。(石田カウントによると38名 ほぼ満席)

WSの進行

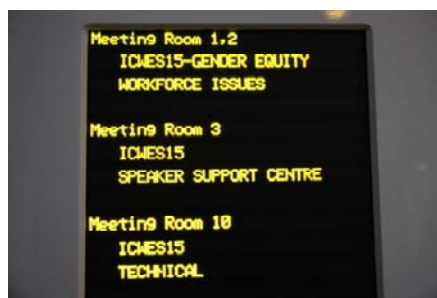
- 10:30 入室時にアンケート用紙（質問用紙）とパネリストの資料を配布
- 11:00 オープニング挨拶（菅原）
会長挨拶（岩熊）
- 11:05 各パネリスト 5分の自己紹介
(この間参加者にはパネリストへの質問を書いてもらう。)
5分間の休憩、質問用紙回収



PRチラシ



直前のパネリスト交渉



会場の案内ボード



最終打ち合わせ



パワーポイントチェック

- 11:45 司会者交代（山本）
会場からの質問やパネリスト同士の意見交換
- 12:20 まとめ
- 12:25 エンディングの挨拶

オープニング挨拶は海外での活躍経験の多い菅原によるウイットに富んだお話で非常にリラックスした雰囲気が始まった。岩熊理事長による当会とWS開催の経緯が紹介され、WSがスタートした。パネリストの自己紹介は皆さんこちらが意図していた内容でお話され、パワーポイントも分かりやすくパネリストの職業や会社あるいは国での労働条件の問題等が大体把握できた。

当初心配した「質問が無い場合」のためにあらかじめ質問は用意しておいたが、非常に多くの質問が出てきて逆に時間が足りない状態であった。山本さんの機転の利いた司会はWS自体の雰囲気を盛り上げてくれた。

以上、WSの様子であるが、今回のWSの成功はそれぞれ違う分野のパネリストに参加してもらい、さまざまな意見を聞くことができたことであるが、何といても菅原・山本の英語に堪能なベテランの司会者によることが大きかった。

最後に、我々同様、どの国の女性も結婚・子育てと仕事の両立が一番の悩みであることが分かった。

パネリストの皆様、司会のお2人（山本、菅原）、ICWES企画委員の皆様、JWEF 田頭、最後に氷上御主人、カメラマン石田心からお礼を申し上げます。（敬称略）

*このWSの結果は集計後 INWES 本部に提出予定です。

パネリスト

- 井本郁子（NPO） 田中幸子（JWEF）
- Sue Bird(英国) Alison McKechnie(オーストラリア)
- Park, Hye-Young(韓国)

司会 山本 敬子(NPO) 菅原 香代子(JWEF)



パワーポイントチェック



お客様案内係



スピーチ準備



歓談するパネリスト



無事終了ーハグ



会場風景

7月22日、ICWES15のプログラム最終日、ついにその日が来てしまった。一人ではない、菅原さんと二人でやるから、助けてもらいながらできると思いつつも準備不足の不安がよぎる。専門の水道分野ならどんなことが話題になるか容易に想像ができる。でも今回は女性技術者の社会・職場での問題。

朝、会場に到着して前段のセッションが続く中、廊下の隅で気休めに資料を読む。まったく自信がないのに、何とかかなと思うこのいい加減さに自分で呆れる。11時の始まりが近づく。会場の準備が始まり、参加者が予想以上にたくさん集まってくる。日本人だけではない。オーストラリアの人、アフリカの人、アジアの人などなど。パワーポイントの準備、パネリストが着席、そして菅原さんの司会でワークショップのスタート。緊張感が高まる。

5名のパネリストの話は簡潔で、ほぼ時間通りに終わる。次に参加者がパネリストへの質問を書く時間。ここで司会の交代、私の番になる。10分程度のこの時間で気持ちが落ち着く。木村了さんの発案で決まったこのやり方は本当に助かった。いろいろな人から勝手な意見が飛び出したら、私の力ではうまく調整ができない。前もって紙に書いたものを選んでパネリストに話してもらえば、整理がつく。質問用紙がどんどん集まってくる。しかし、いろいろな癖のあるアルファベットが並んでいる。紙を選んで読み上げようにも読めない。焦っているから文字が頭に入ってこない。しょうがない。最初の1行だけ読んで「これ誰のですか。読めないの自分で直接質問して」と言ってしまう。日本人の書いたものはとても読みやすい。質問が日本人の田中さんと井本さん、オーストラリア人のMs. Alisonに集中してしまう。木村さんからパネリストにうまく平等に振り分けてと耳打ちが入る。質問用紙選びに集中して、パネリストの回答が耳に入ってこない。終わりの時間が迫ってくるが質問用紙はまだまだある。残りは終了後パネリストの方に直接聞いてくださいと言って断るしかない。

さて話をろくに聞いていないのだからどうやって締めくくることが大問題。とっさに「今、女性技術者が抱えている様々な困難を解決するための第1歩はなにかをパネリストの皆様にご回答をいただいで終わりにしたい」と言ってしまう。これは以前水道のセミナーで使ったセリフ。

最後は調子に乗って「3年後、皆さんが自国での努力の結果を発表するためにまた集まりましょう！」とよびかけてしまった。終わって、皆さんに良かったと言ってもらい、安ど感で満たされた。



会場前での名刺交換



第2部司会準備中



名コーディネーター



もう1人の司会の菅原さん



ガラナイトにて

今回のオーストラリアでの ICWES は近いようでいて、実はアデレードまでは香港経由の格安チケットだったせいもあるのですが、成田を出てから 14~15 時間後に到着という、とても長い旅でした。

そして慣れないオーストラリア英語ということに加え、INWES-J と NPO のポスター、そしてワークショップの参加という、かつてない有意義な会議参加でした。中でもワークショップは話題を提供し、会場からの質問に答えるということで、相当の緊張 (!) でした。誰でも少なからずそうだと思いますが、専門のことを話すときはある程度自分の中で Q&A ができているので気分的に楽ですが、専門外のこと (ジェンダーとかワークシェア) については、知識も言葉も足りない上に、どんな質問がくるのかもわからず、直前までとても心配でした。

日本の女性をとりまく状況の問題。それは男性も女性も働きすぎの社会、少ない保育所や学童保育、その結果 (あるいは原因) としての男は外へ、女は家庭の考え方への根強い支持。そんな話を、自分の経験も交えて説明。とにかく技術職や管理職の女性の割合が世界最低といわれる日本の社会のことですから、理解してもらえるかまったく予測不可能で、場合によっては、やっぱり日本はこの点では開発途上国だという反応もありえるのではないかと思っていました。ところが、意外なことに会場のみなさんは、夫の転職に振り回される悲劇を、自分の身にも起きるかもしれない深刻な問題として、笑いながらも受け止めてくださいました。これはとてもうれしいことでした。そう思って考えてみると、アメリカ人の女性と結婚した日本人の知人はどこに住むかという課題でいろいろ苦労しています。日本か合衆国かという深刻な問題もありますが、合衆国の国土自体もとてつもなく広いので、その悩みは半端ではなさそうです。今は、彼のほうはネットで自宅勤務が可能な仕事を選択、彼女の勤務先にあわせて、日本から遠くはなれた田舎町に住んでいます。彼らには 2 人の小さい娘さんがいるので、その選択の背景がとてもよくわかります。

今回のセッションが終わったあと、若いオーストラリア人と思われる女性の方に「子供たちは寂しがっていませんか?」と、とても深刻な表情で質問をうけました。おそらくその方も私とおなじように子育てと仕事の両立に悩まされていたのだと思います。私はどこから話をしているのかわからないまま、慌ただしく人が動く会場の片隅で、つたない英語で「お母さんが幸せであることが大事だと思います」と伝えました。その意味をちゃんと語るのは、簡単なことではないことはいまでもありませんが、ゆっくり話す時間もなかったのです。しかし、その方の表情から、おそらくそのことばの持つ意味を理解していただけたのではないかと思います。名前を伺うこともで



なごやかな雰囲気 (左は田中さん)



Sue Bird (UK) さん



Park, Hye-Young (韓国) さん



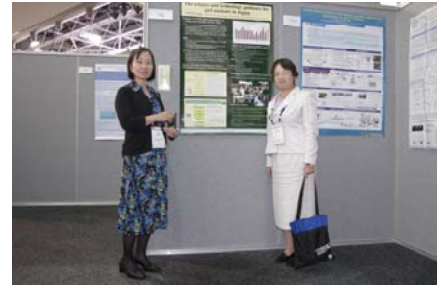
Alison McKechnie (Australia) さん



無事終了

きませんでした。お話をできたことが強く印象に残っています。

あれから、どうなさっているか連絡をとるすべもありませんが、きっと、今日も元気に働いてくださっているに違いないと思っています。



INWES-J ポスターの前で